サルゼ
第十三リイヅル　上

87

サルゼント氏第三リイドル

明治六年四月

松山棟菴譯

特34
87

サルゼント氏第三リイドル序

古言ニ云ク他人ヲ愛スルハ猶ホ己ヲ愛スルカ如クス可シト抑天道ヲ恐レ慎テ人ノ人タル至誠ヲ盡シ父母ニ孝アリ朋友ニ信アルモ畢竟皆是レ一ノ愛心ヨリ発セサルハナシ苟モ人ト生レテハ須臾モ此愛心ヲ離ル可カラス若シ否ラサレハ忽チ兇暴蠻野ノ域ニ陥リ彝倫交際ノ道頽然トシテ復タ立ツ所ナシ是ヲ以テ世教ノ本旨ハ只天下衆庶ヲシテ勉テ此愛心ヲ養ヒ以テ德

ニ進マシムルニ在ルノミ蓋シ此心ヲ養フヤ固ヨリ脩身敬天ノ學ヲ講スルニ非サレハ其縕奥ニ達シ難シト雖𪜈亦其意義ノ甚タ深遠ナルカ為ニ幼童女子ヲシテ遽ニ之ヲ解セシム可ラス故ニ此輩ノ読本トス可キモノハ所謂ル「リイドル」ニ若クハナシ乃チ「リイドル」ノ書タルヤ世ノ善人物ニ觸レ事ニ臨テ其愛心ヲ發動セシ事跡ヲ載タルモノ多ケレハ實ニ美事小話𪜈云フ可キモノナリ是ニ於テ乎余「サルゼント」氏ノ著述セル第三「リイドル」ニ就テ幼童女子ニ解シ易キ者ヲ抄譯シ僅カニ一書ヲ成セリ今之ヲ童蒙讀本ノ初編ト為シ継テ同氏ノ第四及ヒ第五「リイドル」中ヨリ抄譯シ以テ其中編下編ヲ充サント欲ス語ニ云ク遠ニ行クモノハ必ス近キヨリスト幼童ノ輩此書ニ由テ愛心ノ一斑ヲ窺ヒ得ハ遂ニハ其脩身敬天ノ縕奥ヲ窮ルモ亦何ツ難シト為ンヤ是レ余カ此書ヲ編集スル所以ノ素心ナリト云爾

明治五年
壬申十月

柗山棟斧 誌

サルゼント氏纂 第三リイドル目次

巻の上

雲の事 寓言
鉄沓の釘の事
黄金の嗅烟草入の事
加里布と織屋との事
王と佞臣との事
土留古の僧と王との事
慈悲の心の事

胆氣ある事
長者を敬ふ事
惡き言葉を用ゐべからざる事
否と答ふべきを學ぶ事
善き贈物の事
少女が奇特なる行ひありし事
森の覆盆子の事

巻の下

志邉里屋の女丈夫の事
氣高き心の威勢ある事
良美由須が事
麻文列五留と良門土との事
金財布の事
自から省みる事
冨る人と貧しき人との事
酒を禁じ食を節する事

目次終

サルゼント氏第三リイドル巻の上

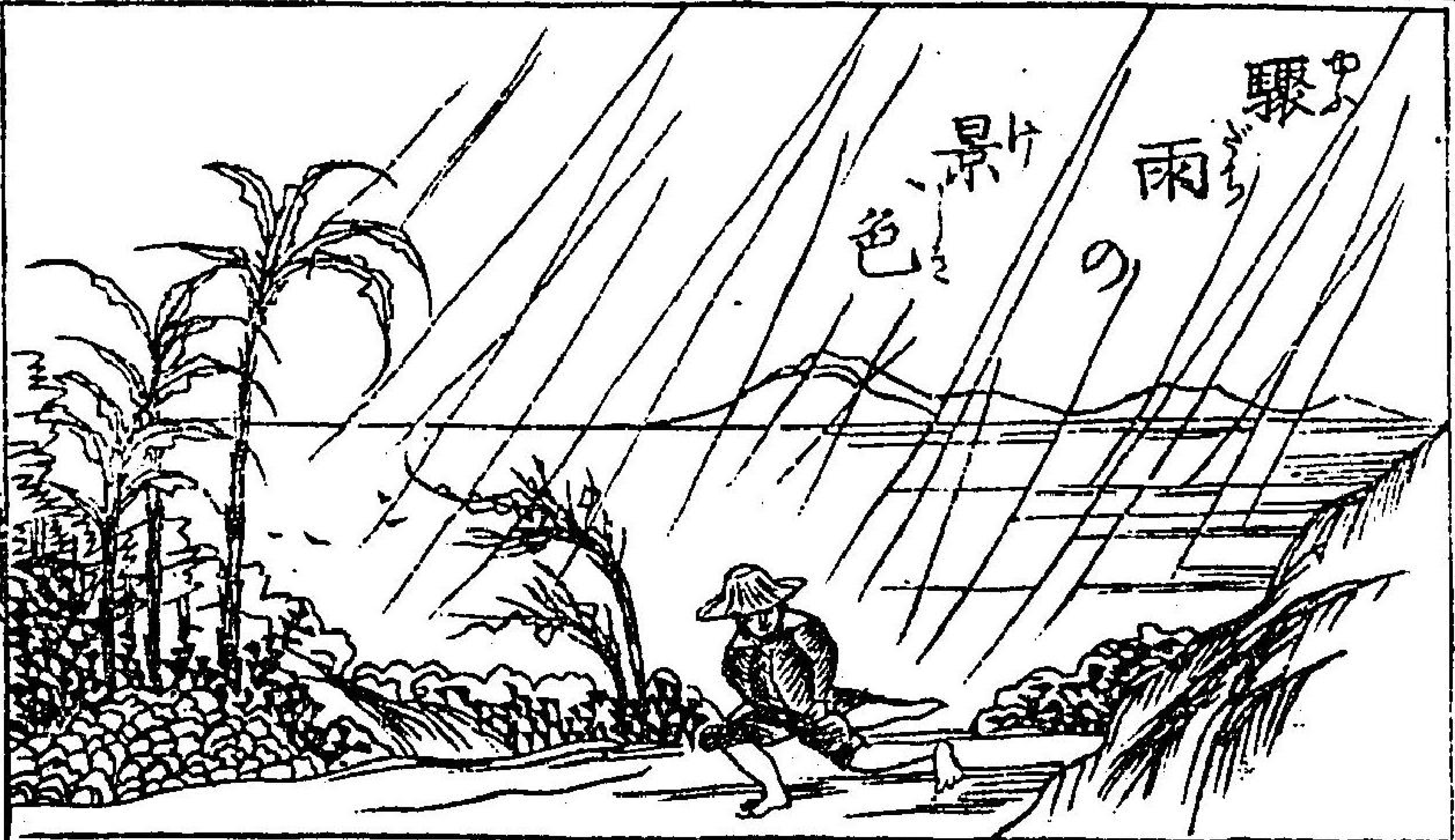
慶應義塾同社　　松山棟菴　譯

雲の事　寓言

夏の暑さの頃一日朝まだき或る海の邊より一點の小さき雲の立昇りて宛も稚き小兒の戯が如く飄然と青空に浮びけるが折しも長の旱魃にて田畑ハ燥きて裂んとし草木も枯るゝ計なば此時ゝの小さき雲ハ已が身に何の憂もなく

又何の苦ミもなく朝の風ふ吹もて彼方此方ふ漂ひて遥ふ下を見下せバ額ふ玉の如き汗を流したる貧しき百姓共の稼ぐ者あり此有様を見て歎息の聲をなし呼我この貧しき百姓共の苦ミを輕くし憂を除きて其飢と渇とを救ふべきふ何か一事のあらすしやと云けるが頻て日の漸く昇るふ從ひ此雲の容も漸く大くなりて人間の為ふ其一命を擲つべき程の志も亦益々固くなりされバ地上の暑さハ更ふ烈しくなりて日光の燀きハ恰も火の燃るふ齊しく彼の百姓共が田畑ふ稼ぐ其隙も流石暑さふ堪かねて眩暈を覺る程なれど貧苦ふ迫る悲しさふ尚も稼を怠らざ折々腰を伸しつゝかの雲を仰ぎ見てさも怨めしげなる顔容ハ實ふ憐なる風情なり此時彼の雲ハ我百姓共を助けんと云つゝ徐々青空より降来らんとせしが曾て此雲のいと稚くして海底ふありし頃成長の後ハ一帯の雲となりて大空よ立登るとも再び地

上に近くなりしバ必ず先生との話を聴しゆゑ今此事を憶ひ出し暫時の間猶豫して痛く惑へる様子なりしが竟に思案も一決し善を為さんと止まりて少しも惑ふ氣色なく更に大喝一聲してかの百姓に告るにハ汝地上に身を勞して甚だ疲れたり我今汝を助くべしと云つゝ彼雲ハ一念凝さる有様にて俄に其身を擴ろげ甚だ廣大となりけるが斯く廣大の容にもなり得んとハ自から思案にも及ばざる程の事なりし斯て


驟雨の景色

彼の雲ハ天の使の下せる如く大地の上に立ふさがりて左右の翼を張出し燥ける田畑の上に臨ミ威勢を示せその氣色に地上の禽畜懼を抱き草木風に靡きたれども唯地上の人々ハ固より此雲の恩恵を與ふる趣意たることを知れまじ

バさして驚く者もなかりけり却説再び彼の雲の云く我汝を助くべし汝我を迎へよ我汝が為に身を殉さんと益々其大なる志にて勇氣凛々たる勢ひをなし電ハ彼が身を穿ちて閃めき雷ちハ其際に轟きしが忽ち砕けて一陣の驟雨となり以て地上に厚き恩澤を與へたるなり實に此雲の悲愛の心深きを思ふべし右の驟雨ハ全くゝの雲の妙工にて假令其為に彼が死を致せしも亦其行ひの美なるをや又遙に地上を離れ

天上の日光によりて美麗王の如き虹霓を大空に画きしハ所謂る身を殺して仁を為すといふ愛情の別を告る徴しなるべしさるにこの虹霓の如きハ忽ち消て其痕をも見ざりしが雲の助けし地上にハ尚も久しく其恩澤を被ましとぞ

銕沓の釘の事

一人の百姓ありて或る日市街に出て若干の穀物を直段よく賣拂ひ其金子を財布に納めて熟ら自から思ふやう今直に家路に就て急ぐならバ

必ず日の暮ざる内に吾廬に達すべしと因て自
から馬に跨て彼の財布とも馬の背に負せ家路
をさして立去りしがやがて午の刻頃に一の村
里に至れバ暫時の間小憩をし又此處を出去ら
んとて馬を引立しとき一人の馬夫来り其姿を
見て足下の馬ハ左の後足の鉄沓に一本の釘抜
たりといふ百姓答へて其義ハ乗置給へ吾家へ
ハ凡そ二十里の路程なれど此鉄沓ハ大丈夫な
るべし我ハ甚ぐ心ぜきたりと云ひつゝ家路に

出行たり此日の午後に及びし頃ゝの百姓ハ馬
に秣かもんとて再び馬を駐めて或る旅籠屋に
腰を打掛居たるに折しも又厩の廝卒来りて其姿
を見て足下の馬ハ左の後足の鉄沓に一本の釘
抜たりいざ我鍛冶屋まで此馬を牽き行て鉄沓
の釘を打せでやといひけれバ百姓答へて其義
ハ乗置給へ吾家までハ最早六里計なり此馬ハ
其路程を行くに差支へなかるべし我ハ少も時
刻を移し難しと云ひ捨つゝ馬に跨りて出行しが

其処より總の路を行し頃馬ハ俄ふ蹶となりて屢々趺き遂ふ横さまふどうと倒れて一本の足を打折たり斯て此百姓ハ何と詮方なくざれバ路ふ倒れし馬を打もて金の財布を己が脊中ふ負ひ徒歩ふて道を急ぎしが漸く夜の深る頃始めて吾家ふ歸るを得たり此時獨り自から歎息して云く我斯る難儀ふ逢たるも畢竟唯一本の鉄沓の釘を等閑ふせし故と

黄金の嗅烟草入の事

一ろ隊長曾て配下の士官を集めて倶ふ飲食を為せし時其頃新さふ求めたるふや極麗しき黄金の嗅烟草入を出し之を坐中ふ吹聴して頗る誇る色なりしが良なりて隊長ハかの嗅烟草を一捻ま用ひんとて己が懐中を探りしふ不思儀ふも嗅烟草入のなかりけれバ心大ふ驚きたる体ふて士官等ふ打向ひ余が嗅烟草入ハ如何せしや若し足下達の内誰か誤りて懐中せしふハなからやと云けれバ士官等ハ皆一時ふ其席

を立ちて各懐を開きたれど更に嗅烟草入ハ見へざりけり此時一人の旗手のミ始より其席を動かずして何か心の安からざる様子にて坐中の人に向ひ我固より嗅烟草入を掠めたる覚なしこハ吾名聞に預る一言なれバ強ち懐を開ずともよかるべしと云ひければさして詮儀の仕方もなく彼の士官等隊長の宅を辞し去るとき人々互に相点頭き旗手を目語して必ぞ今日の賊ならんといへり斯て翌日に及び隊長ハかの

旗手を呼寄いひけるハ昨日見失なひし嗅烟草入ハ全く余が粗忽にて其後見付出せりその仔細ハ余が懐の蔵包の内に一の孔ありしゆゑ其処より縫目の中に落込たるものと見へたり扨又汝ハ昨日何故に餘人の如く懐中を開くことを拒しやと問ければ旗手答へて此一事ハ唯貴殿にのミ敢て語るべし吾両親のいと貧しきが故に常に我給料の半を贈りて養ひければ吾食事におゐて未だ温かなる物さへも食ふこと能

なしに昨日ハ偶々貴殿の饗應に預りし事なれバ吾食ふべき食物を竊に懷中して吾兩親に贈んと欲せしなり然るに若し懷ろを開きて其食物を坐に落さバ我豈愧なきを得んやとなく〳〵物語りけれバ隊長ハ之を聞て大に悅び掌を拍ち一聲を發して嗟汝ハ誠の孝子と謂ふべし今日より汝吾家の食椅に就き日毎の食事を取らるべしされバ汝が兩親を養ふにも亦少しハ容易かるべしと云へり其後隊長ハ嚮の士官等を

再び饗應に招きてかの旗手が無實の罪なりしことを詳かに說明し且其證據として夫嗅烟草入を取出して手から之を旗手に與へしと猶右の旗手なる者自ら顧みて一の私曲なく又一つの鄙劣なきを知らバ毫しも心を慘るに及バぞ何で潔よく其懷を開かざりしや若し斯の如くなきバ却て其行を稱すべきなり凡そ人たる者ハ粗食を喰ひ褞袍を衣るも己が力と合ふ所にて正路に得たる物なれバ假令他人の之を謗

め知るとも決して恐るゝことなかるべし

加里布と織工との事

往昔馬具達篤の都に加里布と云へる君ありけり當時の世界に名も貴く計なる洪大美麗の宮殿を造なく住けるが此宮殿の門前に古き一軒の草舎ありしハ年老たる貧しき織屋が住居なり此老人ハ日毎に自から機を織り綫の金銭を設けて其心に滿足し一錢の借財もなく聊か苦勞もなく人をも猜まず人にも猜まるゝことなく安樂に其日を送りける故この老人の草舎ハ王宮の門前にありて甚だ見苦しきが由ゑに王の宰相ハ遠慮會釈もなく之を取毀ちたく思ひたれど加里布の意ハ然らず若し之を取毀たんとならバ先其主人に談合し相當の價を拂ふべしとの命を下せり是故にかの宰相ハ織屋が宅に到り若干の金子を出して家の代金を拂ふべきなれバ速に住居を移すべしとの義を說き勸めたりけれども老人ハ絶て納得の氣色もなく答

へて云く其金子ハ受るやうなりけれバ故に収め
給へ我用ハ此機を織りて得る所の金子をもて
猶贏はあり我ハ此家に生れたり吾父ハ此家に
て死せり我亦此家にて終らんことを願ふなれ
バ此家を譲ることは能はずといひけれバ宰相ハ
之を聞き怒の顔色にて云けるハ汝が草舎ハ吾
王の宮殿に間近ければ日常吾王の御目障りなれ
ば汝若し頑固にして此家を立去ずとならバ家
の代金をも與ふるに及ばずこの處を追拂ふべ

しと老人の云く王若し好んで吾身を追拂ひ吾
家を毀んとならバ何ぞ難からんやされども王
若し此事を為バ我日々吾家趾の礎上に坐して
痛く歎き悲むを見ん斯の如くせバ王の寛仁な
る心に於て吾零落せしを見るに忍びざること
もあらんかと答へければ宰相ハ之を聞て大に
憤りて立去りて直ちに王の御前にいで彼の輕卒
なる老人が罪を鳴し其家を毀べき允可あらん
ことを乞へれども王ハ此事を固く許し給

ハ其宰相ニ云るやう汝宜しく我金を費して老人が家を修覆すべし左すれバ余が名譽も必ず彼が家と共ニ世ニ傳へて後世の人余が宮殿を見れバ余を稱して大王なりしと云んか又顧ミて織工が草舎を見れバ余を称して正義なりしと云んか

此王ハ始より一ツの曲事をも行ふを慊ひ其宰相ハ既ニ織工が通義を奪んとせしなり斯る君臣ニかねて孰れを賢とし孰れを愚とすべきや黙して知るべきなり

王と佞臣との事

往昔獅々里の君ニて治鬼志須といへる人ハ鉅萬の富を重ねて衣食住共ニ栄耀栄華を極めたれども只心中の安樂のミハ未ぞ之を覺へざりしが其佞臣ニ太茂九列須といへる者あり或日王の御前ニいでゝ云けるハ大王の如き幸福なる君ハ古来未だ聞ざる所なりと王之ニ答へて云く余が幸福を左程ニ結構と思へるならバ其

幸福ハいかなるものか汝今試みに余に代るの意ふきやと宣へバ太茂九列須ハ大に喜びて王の意に随むことを願へて扨治鬼志須ハ臣下に命じて王宮の正殿に饗宴を開き太茂九列須が為に王服を着せて金銀を鏤めたる椅子に坐さしめ棹子の棚にハ數萬金の値もあるべき金銀の器を陳ね且此饗筵にハ薫油を具へ花を飾り香を焚き食盤中にハ山海の珍味を尽し數多の美人に命じて太茂九列須が給仕を取らしめ一

彼が意に從がせしめたり斯て太茂九列須ハ意外の歡樂を盡しつゝ自から昇天せし心地にも成て其饗晏に現をぬかして居たりしが斯る幸福の際に當りて不圖天井を仰ぎ見れバ危殆なる哉一條の髮の毛をもて大なる抜身の劒を倒しまに釣り下げて今にも已が頭の上に落んとする有様なり太茂九列須ハ之を見しより心大に恐怖して喜びの興を醒し彼の窈窕たる美人の前後を擁すると雖ども金銀の杯盤煌々と

して坐上を照すと雖ども山海の珍味前に陳ね
たりと雖ども一として太茂九列須が愉快を取
るに足らず絶ず食盤の上に手を進るさへに恐
れ慄きて自から立て王服を脱ぎ去り王に謝
して云く臣斯る危ふき地位にありてハ假令此
幸福を受るも意なしとて又其從前の賤しき身
分に復らんことを懇願せしとあり
右の趣向にて治鬼志須ハ假令巨萬の富を重ね
王位の貴きに居て名譽を得ると雖ども其王た

るにハ斯る苦難を免きぞとの意を暗に示せる
なるべし

土留古の僧と王との事

土留古の國に一人の僧あり曽て韃靼の國に旅
行せし頃或る日旅籠屋と取違へて國王の御殿
に入込たり暫時佇て左右を顧みるに長き廊下
あるをバこゝにて脊負たる包を卸し毛氈を敷て
其上に憩はんとせり斯てありける内忽ち番兵
之を見附て汝此處にて何事を為すやと問ひけ

きバ此僧答へて我この旅籠屋ふ一宿せんとて来きるなりといふ番兵等之を聞て大ふ怒ま此處ハ旅籠屋ふあらぞ勿体なくも國王の御殿なれバ急き立退べしと呵まけるが斯る折しも偶其王躬から此廊下ふ来まて彼の僧が取違へてこゝふ来きるを冷笑ひて汝ハいかふ愚鈍なきバとて我宮殿と旅籠屋とを見分ざりしハ何事ぞやと詰まけきバ僧の云く願くハ大王寛仁なきバ暫時猶預して愚僧ふ一二の箇條を問しめ王へ元来始めて此家を建しそれハ誰が住居せしや王答へて云く余が祖先なりされバ先頃までこゝふ住居たる人を誰とするや王答へて云く余が先君なり僧又問て云く今日誰が住へるや王の云く余自から住へまされバ大王の後ハ誰かこゝふ住ふべきや王の云く余が太子なり僧之を聞て歎息し嗟一の家ふして斯く屢々其客人を異ふし絶間なく之を迎るときハ果して宮殿ふあらぞこれ即ち旅籠屋なりと云ま

慈悲の心の事

初留利亞武と返里といへる二人の童子ありし冬の日雪風寒き枯野の遊びに出行しが其路すがら降を積りたる雪の中に見馴ぬ人の打伏して熟くも能睡りたる体なり初留利亞武ハ之を見て痛く憐みの心を生じ斯る寒き風に晒されて野路の上にねむらんにハ露の命の争でやたすかるまじと思ひ臥たる人の傍らに寄て其睡を喚醒さんと幾回も揺を起せども更に覺もなき様子なり返里ハ之を見て微笑ひして云けるハ君が好事ならで思ふ儘に揺を起さんもよけきどさをとて何の益かある此男の酒に酔たるを知らざるや棄置き給へ素より樂の心配なる筋にもあらじ兎も角この寒風にてハ手も麻痺たる如くなれバ早くも共に路を行ま若じといひけれバ初留利亜武の云くされバとて今此人ハ痛く凍へて将に死んとせり返里の云く其将に死んとするハもとより理の當然なり彼迚も本酒を

呑べき身の責ハなかるべし初留利亞武の云く呼人として誰か常に誤まざるを得んや又誰か他人の慈悲を仰がざらんや彼が假令酒に酔たりとて之を打棄て顧ることなく其死に陥らしむるの理あらんや返里の云く君ハ六か鋪

理屈を述べ給ふものかな我ハ此處を立去るべし最早この寒風に堪がたし君も我と共に去るの意なきや初留利亞武の云く君若し此處を去らんとならバ君が意に任すべし我ハ假令彼の人の不行跡なるによりて其人物の賤しきを知るといへども亦成丈の力を盡して彼が一命を救はんと欲するなり我能く吾務むべき所を知れバ去るに忍びずといふ返里ハ之を聞て心に憤りたる体にて此處を立去れり斯て初留利亞

武ハ獨り後ニ殘しが曾て聞しニハ雪ハよく風を防ぎて又人の命をも保つべきものといふことを不圖思ひ出たれバ先ぢくりの雪を掻集めて彼の臥たる人の身を覆ひ斯して後何卒して撬を得まほしく思ひけるが間近ニ村里ぢあれバ其方へ馳行しニ幸ひ深切なる一人の百姓ニ出逢ひて事の次第を物語りせり此百姓ハ早速ニ撬を出して初留利亞武をのせ之を引て彼の雪の中ニ伏たる人の處ニ行き初留利亞武と兩人ニて其人を撬ニ乘せ之を引ながら最寄の家ニ到り織理の粗き手拭をかりて彼人の膚へを頻りニ摩擦けれバ忽ち蘇りて人事を省るニ至まり斯て其人ハやゞて死ニ向なんとせし樣子を聞て大ニ驚き自から深く心ニ感じ初めて己が不行跡なるを後悔し其後ハ意を決して堅く酒を禁じ生涯この禁酒の戒を守り更ニ志を改めて其行ひ正しかりけれバ自然人ニも尊敬せられ又人の信用をも得ニ至り斯て後ハ折々

少しの手土産を携さへ初留利亞武とかの百姓の許ふ来りて厚くむかしの禮を述べしといふ

胆氣ある事

凡て危ふき難ふ罹り又ハ恐ろしき事ふ出逢ともも心の慥ふして動ぜざるハ甚ど大切なることなり心慥かなるもハ其事ふ驚き周章てゝ却て危ふきを増すなどの患ひなく斯る場合ふ差臨みて人たるものゝ為べき上策をも必ず得るもの

なり今其一例を擧んふ合衆國の邉志留馬仁屋洲ふ於るる馬留知蒙留郡名と曾須奎半那地名との間ある蒸氣車道ふハ與留久の南凡そ五里許の處ふ「トンネルズッレデー」と云ふ橋あり彼の一千八百五十五年の頃此橋の出火ふて焼落たるとれ里武といへる齢ひ漸かふ十二歳の童子ハ其働ふよりて心の慥なることを現ハせり乃ち此日の朝九時頃よ彼の橋の木組ハ全く焼落たりこの火事を見物をる者二十人許ふて里武も其中

ふかりしが獨り心ふ思ふやう新興留久をさし
て行く所の蒸氣車ハ今ふもこゝふ来るべし若
し之を留めざれバ橋の焼たる火の坑ま落込て
數多の人を損なんハ必定なり扨ハ其蒸氣車を
留んとて足ふ任せて馳行しが此橋より二百「ヤ
ールド」（一ヤールドハ我三尺なり）許隔てゝ鐵道の廻り角
の處ふ到り向ふる方を眺むれバ果して此方ふ
向ひ飛が如く蒸氣車の近き来るを見たり此時
里武ハ又思ふやう常々意根悪き小供等が何ゥ

鐵道ふ異變のありげなる真似をして屢々蒸氣
車の器械方を欺むきしことあれバ今我之を知
らせんふも又例の意根悪き小供の仕業ると思
はれなバ器械方の車を止るま心を用ひざるや
も計難し左あれバ非常の仕方なしくハ叶ふま
じとて自から大胆ふ鐵道の中央ふかけ込て両
手を揚て器械方ふ車を留よと云ぬ手の手語を
なして真直ふ車の方ふ向ふて息をも継ぞか
け行しが器械方ハ斯る危ふき有様ふて稚き童

子が来るを見附急に器械の螺旋をかへ車を留めて遽しく何事のありやと尋ねれハ里武ハ息をも継あへず只橋が焼落たりと云ふ俄に器械方ハこれを聞てヤアかの橋が焼落たるかとい

ひつゝ大に驚きたる様子ありしがこハ固より相違もなきことなれバ既に蒸氣車の打砕けんとせる大災難を纔か四百「ヤールド」の真間にて運よくも遁れたるハ全く里武が働なるを知し此橋が焼落たりと口々に叫びけれバ其聲前車より後車に傳へて乗組の客ハ俄に銘々車より飛び下りて斯る大難をも免かれたりけるハ全く天の恵なりとて人々皆里武を命の親とも敬ひ即坐に多くの物を與へて其大

恩を厚く謝したり又此蒸氣車の社中よりも里
武に金百圓を贈りしとなり
右の如く里武ハ夥しき褒美を得たるに尚彼が
行ひを賞するものあり其仔細ハ彼自から顧ミ
て斯く數多の人命を助けたりと心の中に思ふ
こそいと心よ快よたものなれバなり

長者を敬ふ事

希臘の都亞然須におゐて國家の譽にとていと
賑ましき祭の興行ありしとき一人の老先生あ

りて此祭の見物に出掛しが折節あやうく時刻の
晩れたれバ其年齢と人品とに相當しき棧敷ハ
皆已にふさがりたり此時年若の人達ハ彼の老
先生が雜沓の中にて難澁しさも途方にくれた
る体を見附て先生もし我が棧敷に來り玉へ
如何やうとも都合すべしとの手語をなしける
ゆゑこハ喜しやとかの先生ハ羣集の人を押分
て急ぎ其處に行けれバ案に相違のことにて此
若き人達ハ只竊々と嘲り笑ひて互に間近く

席を占めて老人の坐すべき場處もなかりしバ其人の益々困却せる容子まで衆人の見世物とも成たる有様なり斯て亞然須人の桟敷にハ賑ひの興にうかれてありけるが此折しも又他國人の爲に別段設けたる桟敷あれバかの老先生ハ途方にくれながら詮方なくも麻瀬戸文人の居る桟敷の方に到りしが此都人ハ亜然須人よりも尚教育の届かざる者なれども此老先生を見て尊敬の礼を尽し各席を讓りて其間に坐せしめたりされバ流石の亞然須人も己が都人の不善なる行ひに引かへ麻瀬戸文人が徳行の高きを見て忽ち其心に感服し一度に聲を揚げて麻瀬戸文人の行ひを稱したりこの時老先生聲を勵まして亞然須の人ハ善の善たることを知る者なれども麻瀬戸の人ハ其善を実地に行なふことを得る者なりといへり

惡き言葉を用ゆべからざる事

少年の輩ハ凡て物事に全く不相當の辭を用ひ

或ハ苟にも不敬の語を吐莫かれ汝不敬の辞を用ゆれバ其害の多きことを知ざるや斯る不敬の辞ハ必ず汝が記憶中に止まれバ後来決して之を除き去べからず少年の際に若し不敬の辞を用ゆれバ成長の後に至り自から痛く後悔して忌み慊ふ程の辞にても知ず識ず之を用ふること屢ありこハ皆幼き時より用ひ慣たる辞にて喩へバ恨の忘るべからざるが如くいつ迄も記憶中に止まれバ汝常に意を用ひて成

大褻々しき辞を避るときハ後年に至まで勝を噬の悔なかるべし嘗て一善人ありて偶病に罹り其為に譫語を發して惡むべきの辞を數々用ひし事ありし此人の病快復せし後におゐて其実を告けれバ其人ハ譫語にいひたる辞ハ皆少年のとき惡しき友達より聞習ひたる所にて假令數年の久しきを經るとも己に記憶中に止まりて我心に之を制せざれバ再び口舌に現るゝものたることを始めて悟れりとぞ

少年の輩若し自から誤りて不敬の辞を用ひんときハ或ハ他人の之を云ふを聞ことあらバ右に記せる一例を思ふて之を避ざるべからず凡て善からざることを知るハ人の智にハあらざるなり

否と答ふべきを學ぶ事

凡て事に臨みて否と答へむにハ大なる勇氣の決断なかるべからず若し否と答ふべき時に當りて速やかに否と答ふるときハ其身に於ゐて面倒を省くこと多し抑汝が幸福と汝が誠実と汝が身を重んずる心とハ皆悉く意を決して否と答ふる氣力あるに由るものなり今汝が友達来りて汝が心に不善と思へる樂みを共にせんとし或ハ其遊びを勸むることあらバ必ず剛き心にて速かに否と答ふべし然るときハ再び之を勸むる者なし されども若し最初の答へに因循せバ切々勸めらるゝ遂にハ之を否を得ずして其意に從ふに至るべし斯く自から決断なく自から

その本心に背くときハ惡を拒むの力を失ふて事々物々皆人の誘引に従ふ様になるものなり除世布といへる少年ハ兼てより能く決断の心を養ひ何等の不善にても己に云掛る者あれバ瞬く間も因循することなく直ちに否と答へて少しも他を顧みざりしゆゑ其友達も決して除世布の許に来りて不善に誘ふ者なかりしとぞこハ除世布が例の如く意を決して速かに否と答ふることを得ればなり斯て除世布が両親も

其子の否といふべき答の筋を能く學びてよりハ最早不善の道に誘なはんことの恐なけれバ如何様の處にても除世布が意に任せて行を許せり斯の如きハ子を思ふ親の苦勞を除きしものと謂ふべきなり之に反して列由辨といへる少年ハ如何様の人にも事々物々先方の人の意に愜はんことを欲せしゆゑ誰に對しても否と答ふる勇氣なく只唯々とのミいへり故に一ど して不善の誘ひを拒むこと能はず畢竟惡しき

友達に勧めらせて吾為べからざる事をもなして常に己が難渋を致せり夫故列由辨の両親ハ日夜その子の悪しき路に迷んことを恐れて暫時の間も膝下を離し得ず大に父母が苦労の種となりこれ全く列由辨が心弱くして否と答へ能ハざるが為なりしとぞ

少年の輩常々否と答ふべきことを能く學ぶべくし若し否と答へんとすれど汝が舌強ばりて言ひ得ざることあらば獨り人なき處に行きて否々否々と幾回も反覆して否といふ辭を速に因循せずして明白にいふことを云習ふべし何事に依らず吾心に悪しと思ふ事を人の勧むるとき勢ひよく直ちに否と答んにハ常々己が口中にて否てふ辭を發すべきの用意をなし置べきなり然れども又事によりてハ諾と答へざるべからず喩へバ他人に施さんことを勧る者ありて之を與ふるも彼と我との間におゐて人たるの職分に害なき時ハ諾と答へて否てふ辭を避

べきなり

善き贈物の事

近き頃合衆國の或る都に出火ありて其火の勢ひ殊の外強く折しも冬の事なれバ風烈しく寒氣嚴しくて龍吐水の水までも忽ち凍りける程なれバ火の鎮まる迄にハ數多の家藏を焼き落し目前住居を失なへる人々其近村に寄りて假の住居を需めたり又此火事の烈しき最中にも老人小供ハ途方を失ひ我家の黒烟を後に見捨

て只管他人の慈悲を仰ぎ望める姿こそいとゞ憐なり扨この不慮の天災に逢たる不幸の人々を救はんとて世に善人も多かりしがその中にも此都に住める一人の法師ありてかの類焼人の為にハ様々の周旋をなし又此時の事情を新聞紙に認めて偏く世間に示せしゆゑ彼人達を助けんとて或ひハ金子を贈り或ひハ食物を贈りたるもの啻近き傍の人のみならず遠き里の人までも多少の贈り物をぞなしける斯て彼の法

師ハ數多の金高を募り得て火災を受たる人々を賑し已が善心の滿足を致せりとぞ又爰に贈物を為したる者の中に一人の童子あり労ら小銀六「セント」（一「セント」ハ我一錢ニ同ド）ハ九と古き上着一枚と外に林檎一籃を携へ来りて云く我こたひ類焼人の為に多くの物を贈らんと欲すれども心にまかせざれバ此品ハ聊かなれども我思ひの充分なり既に吾姉妹ども此事を嘲りて笑ひたれど若し衆が如き多くの童子ありて少しの品にても銘々に携へ来らバ其高頗る多かるらんと思ふなりとありしかバ彼の法師ハ之を聞きて童子に云るやう汝が為る所ハ人を恵むの道に叶へり假令其贈物の輕少なればとて之を與ふるに聊かも恥ることと勿れ若し其品汝が力に合ふ程にして本より慈悲の心より之を與ふるとされハ誠の善き贈り物と云ふべきなり世の人々丈の塵も積もれバ山となるの諺を知りて今汝が為る如く各其力の及ぶ丈の善心を尽さバ假令其

物の軽少なりとて赤面の色なく之を與ることを得べしとなり

少女が奇特なる行ひありし事

近頃の話なるが佛蘭西の里園にて或る貧しき家の娘蒸餅屋の店にて一片の蒸餅を竊みしに此「ポリイス」の者之を捕へて引立行んとせしが此有様を見んとて數多の人々彼娘が周圍より群集しけるが中に呂須といへる一人の幼き少女あり此時丁度學校より我家に歸らんとて爰に来合したるが彼娘の捕となりいと難渋なる趣を見て不便の心を起し群集の人を押分て捕へたる娘に近づき貴孃の為なれバ何事なりしとも吾身に叶ふ事を為なりやといひけれバ彼娘ハ之を顧みて妾にハ両親と二人の稚き弟ありて皆食物にも乏しく殆んど飢て死んとせりと其物語をも果ぬうちはや「ポリイス」ハ因人を追立行けるに呂須ハ辛ふじて彼娘が両親の名と其住居とを聴を得たり斯て呂須ハ其娘の不幸に

る上にも差當たる其身の難儀を思ひやりはく
いと悲さに堪ざれバ暫時茫然として居たりし
が良ありて自から思ふやう彼娘が純なる一片の
茶餅を竊みしも全く親兄弟を助けんとの志よ
り出たるなりんきれバ斯る貧苦を救ひんと思
へども其日ハ折悪く呂須が母も都外に行て留
守なりしバ誰に計らん術もなく兎やせん角やと
獨り思案を囬らせ折柄不圖思ひ付き事かあり
たる趣向にて金子の工面をなし得たり其仔細
を尋ぬれバ呂須が家の近き邊りに一人の剃頭
師ありて曾て呂須が頭髪の麗しきを見て頻りに
に譽めつゝ戯れて云るにハ若し貴孃が髪を切
るならバ金五圓にて買取るべし我其髪をもて
鬘を作りたく思ふなりと此事を聞しより呂須
ハ平生其髪の麗しきに誇りしが今ハ却て己を
棄て人を救ふの術とハなりぬされバ呂須ハ眞
直に彼剃頭師の許に到りて竊に吾髪を斷るなら
バ金子を與ふるとの事なりしされバ只今吾髪

を殘らず切取て約束通の價ひを給ふべしといひけれバ此剃頭師ハ固より其心甚だ深切ふして智慧ある者なりけれバこの言を聞て大ふ驚き貴孃が遽ふ髮を切らんと云ひ給ふハ抑も亦何故なりやと尋ねけれバ呂須ハ容易く云々の事を物語れバ剃頭師ハ深く其志しを感じて覺へずぼろ〳〵と涙を流せり斯て金三圓を出し呂須ふ與へて髮を切ことハ今日ふも限るまじ後日復吾家ふ来て給へといひけれバ呂須ハ己が趣向

の成就したるを喜び一礼を述て其家をいで肆店ふ往きて種々の食物を買調へて一の籠ふ入れ彼の蒸餅を竊みし娘の父母ふ恵まんとて路を急ぎて馳行けりされバ呂須が姿ハ髮も乱れて麻の如く肩ふ垂れ惑錯と氣も衝逆しより頬面の色さへ紅なりやう〳〵と彼の貧者が許ふ尋ね到てわびしき草舍の扉を叩けバ夫婦の者ハ見知らぬ小娘が来たるを見て不思儀とや思ひけん又驚きたる体なり此時呂須が云けるふ

ハ其許の貴女ハ恐らく
を今日歸て王をざらく
しきりて心を痛め給
ふあ貴女ハ云々の事を
妾ふ告たれバこの食物
を持參せりといひつゝ
頓て呂須ハ殘れる金子
を老人の手ふ渡し心ふ
滿足せしかども又此屋

の様子を見て怜み思ふ面貌ふて戸外をさして
出行あり斯て呂須が未だ吾家へ歸らざる内彼
の剃頭師ハ其家ふ到りしふ折よく呂須が母も
歸りて内ふ在りあれバ云々の事を委しく告る
ふ母の喜び大方ならねどやがて呂須も歸りけ
れバ其母兩手を擧て娘を迎へつゝ今日の行ひ
を譽めしかバ呂須が心ふも滿足せり又かの剃
頭師ハ「ポリイス」の屯所ゟ行きて呂須が擧動の
殊勝なることを詳に語せしゆゑ蒸餅を竊みたる娘

もさしたる罰を蒙らず唯當然の呵責を受しのみにて刺され篤く善き道を諭されて其罪を免されたりこれより後ハ又世間の人々も彼の貧人を恵む者多かりければ日ならずして彼等が身も亦健かとなり安樂に世を渡りしハ全く呂須が思慮深き慈愛の行ひに由りてなりしとぞ

森の覆盆子の事

老年の兵卒曾て片脚を失ひたれバ木の假脚を作りて之を補ひたる者或る村に来りて餓に病に罹りて進退こゝに窮まりけれバ止を得ず路傍の草舎に這入り藁をしき其上に臥して甚だ難渋の体に見へたり扨此里の貧しき籠匠の娘に阿賀佐といへる幼き少女ありけるが此兵卒の様子を見て深く之を憐み日々彼が草舎に来りて其度毎に半「ペンス」一「ペンス」へ（我二銭弱）の銀銭を與へたりしに兵卒ハ本律義なる人柄なりけれバ或る日痛く氣遣ひたる体にて少女に云ひけるハ我今日始めて貴孃が親達の貧しく暮し給ふことを聞き

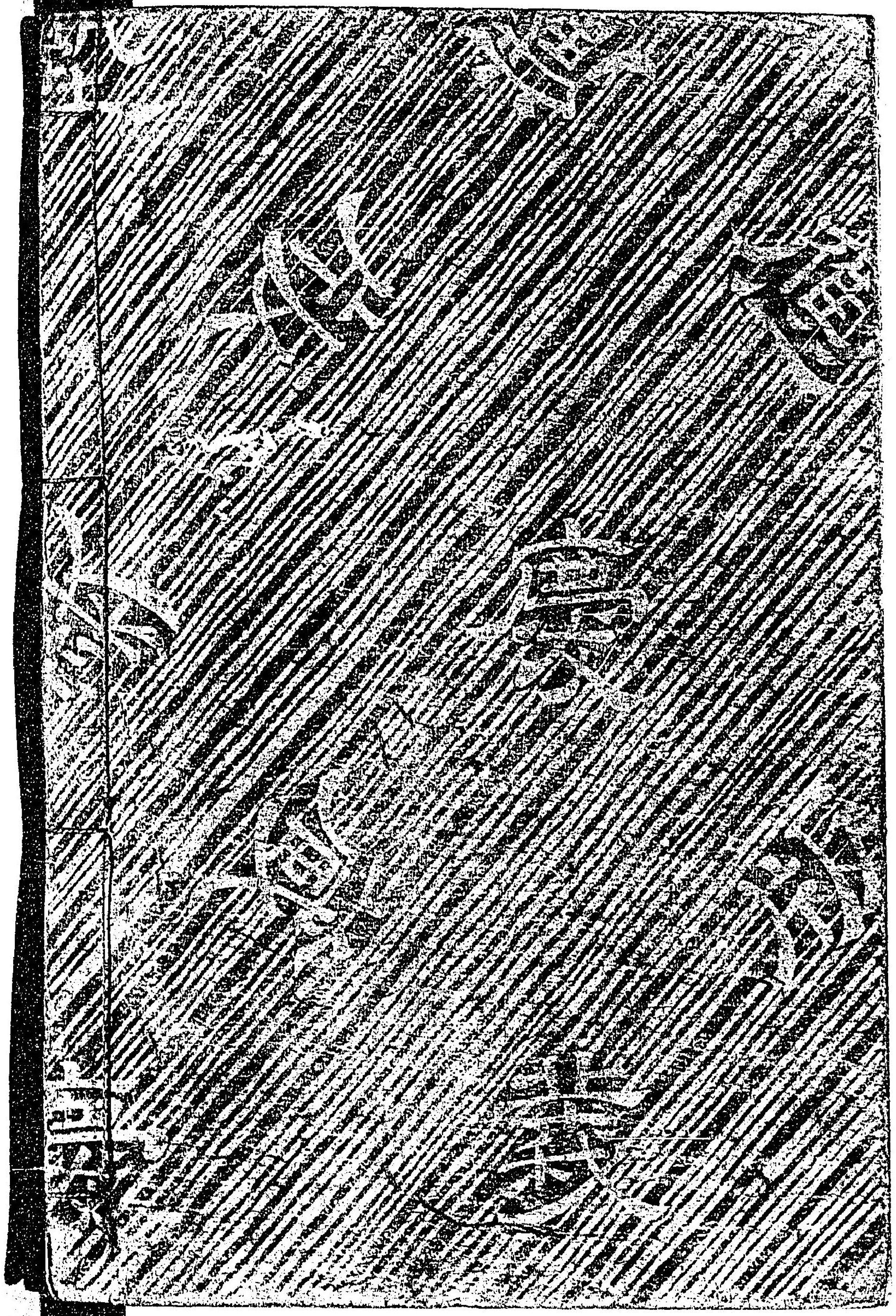
げまされバ貴孃ハいかにして斯く數多の金子を得たるや其実を語り給へよ若し貴孃が本心の許さゞる所にして我に與るものならバ假令一文の錢たりとも之を受んよりハ寧ろ餓て死するに若じといひけれバ阿賀佐の云く其義におゐてハ氣遣ひし給ふな妾ハ道なき金子を得たるに非ず其仔細ハ妾日々彼方の市街なる學校に通へるが其行路にハ一叢の森ありて野生の覆盆子沢山なり妾ハ日毎に其一籃づゝを採

て市街に出しうき半ペンスに賣拂へるなり妾が両親ハ之を聞て甚だ喜びて云ひけるハ世の中にハ我等よりも猶貧しき人の多かるを我等が身ハ叶ふ丈の力を盡して其人を助けざる可らざると委しく其事を語りけれバ彼の老たる兵卒ハこれを聞て両眼より潸然と涙を流し云けるハ貴孃が仁愛の志しと其善き行ひとによりてハ啻貴孃の一身のみならず貴孃の親達までも定めし天の幸福を受べしと此後幾日もなく

然して高位の吏人阿賀佐が住へる里を過ぎしが折しも其馬を憩ましめんとて旅籠屋の前に止まりたるに不圖も彼の病る兵卒の話を聞て其草舎を訪ひきたり此時老たる兵卒ハ稚き阿賀佐が恩愛の情に頼まれたる事を物語りしバ此吏人ハ歎息の聲を發し吁貧家の小兒にして汝が為にかゝる事の甚だ多きハ何ぞや又我汝が老將軍にして其為にかゝることの少きハ何ぞや我即時に命を傳へ此邊の旅籠屋にかゝりて汝が為に最上の取扱をなさしむべしとて此吏人ハ速に其言の如くし次に阿賀佐が父母の許に至て阿賀佐に對面しいと喜ばしき体にて云けるハ可愛き少女よ汝が仁愛の行ひハ余が心を熱くし余が眼を湿せり汝半「ペンス」の銀銭を老兵卒に與へたり其志しに報ひん為なれバ其數に齊しき金銭を請取るべしといひけれバ阿賀佐が兩親ハ大に驚きつゝ是ハ餘りに過分なりとて辭退せしかバ吏人の云く否々こハ唯當坐の

薄き償ひまでなり佳壌が治むる仁愛の志しにハ又更に善き償をも得べきなり其故ハ彼よく他人に深切を尽さバ其身に顧ずて一點の私欲なくいと心に屑よく快よけれバなり元来徳に報ゆる誠実の賜ハ人の心にありて吾身の外の利益にハあらざるなりと

サルゼンド氏第三リイドル巻の上終



第三リイドル 上

特34
87

083639−001−3

特34−87

サルゼント氏第三リイドル

松山 棟庵／訳

上

M6

DAH−1196